

松河戸の沿革

5 風習と習慣(神事、慣習、組織)

松河戸一帯は、庄内川の氾濫などによる被害もありましたが、肥沃な土地で、古代から人間活動が安定して展開された場所でした。

室町時代になると、荘園がくずれて、全国で現在の村組織が起り始めますが、松河戸も庄内川堤防下の周りより一段高い所にある集落単位を「島」と呼んで、村の中の最小自治組織ができます。

島ごとに神社もでき日常生活の中に定着し、風習、習慣も少しずつ変化しながら今日に及んできました。姿を消したものも多くありますが、昭和、平成の時代まで続いた神事、慣習、組織について、先人、先輩方の文献、お話をもとに紹介します。

(1) 島

松河戸は、最小自治組織である「島」によって、日常生活の規則を決めていました。

道下、中小路、門田、八ツ家、河原島、中島の6島がありましたが、その後、道下、中小路が河戸島となり5島となりました。

つき合い、助け合いなどは島ごとに行われており、祭り、講、葬式、溝役などの行事は「島」単位で計画されて、村の中の最小自治組織でした。

松河戸区画整理が終了するまでは、この5つの島は町内会組織として残っていましたが、平成29年度で島という組織は消滅しました。

(2) 祇園祭

京都の祇園祭が有名ですが、健康願う夏のお祭りとして全国で行われています。松河戸でも古くから6島(のち5島)ごとに企画され行われていました。

祇園祭の際、松河戸ではオマント奉納がおこなわれていましたが、青年会の解散、馬の入手困難などの理由により昭和30年代末に廃止になりました。

毎年旧暦の6月15日、16日の二日間、6島からおまんとを出しました。14日の前夜には、それぞれの宿に、島の人が総出で集まってだしを作りました。

このオマント奉納は、午の背にきれいな**なばれん**が掛けられ、**ばりん**という5尺ほどの竹を割ってこれに紅白の和紙を巻き、紙の房などを付け数十本を扇状に鞍に建てて飾った馬を各島より出し、八幡社に集合。その後、白山神社まで行列を作って本殿を3回り、神主の祝詞、お祓いを受け、帰りは互いに「あばよ、あばよ」と声を掛け合い宿に戻りました。

最後の日(ほんやく旧暦の6月16日)の午後には、祭りの余興として、道風公園前の直線コースで馬を放し、おっぱとって全力で走らせました。夜は提灯を持って宿まわりが行われました。



▲祇園祭で道風公園南の県道を走る馬



▲昭和30年代前半頃の祇園祭の宿回り

① 旧暦の6月14日 前夜

それぞれの宿に島のひとが集まりだしが作られた。

長さ4~5尺の竹に、上から赤・青・白の紙の房を付けたものを5~60本作り、鞍の上のまきわらに刺した。このだしは古い島と新しい島では、色や形が異なっていた。

② 旧暦の6月15日くんやく

午後各島より馬を出し、八幡社に集合。その後は草孫神社まで道ゆき神楽とともに行列を行った。

行列の順番は、毎年決まっていて、はな馬は道下島、その後に中小路、門田、八ツ島、河原島、中島と続いた。お宮に到着すると、本田の周りを3回周り、馬をつないだ後、神主の祝詞、お祓いがあった。帰りは、互いに「あばよ、あばよ」と声を掛け合い、往とは逆にそれぞれの宿に戻った。

③ 旧暦の6月16日ほんやく

午前は前日の繰り返し、昼からは祭りの余興として、道風公園前の直線コースで馬を放し、おっばとって全力で走らせた。その後、宿まいりが行われた。

夜は祭りの中心となった青年会が提灯を持ち、ワッショイ、ワッショイと村中を練り歩き、有力者の家々をまわって祝儀を集めた。

④ 旧暦の6月17日山おろし

祭りの後かたづけをして、祭りの一切が終了した。

資料 松河戸誌研究会から

(3)天王祭

村に店屋(よろず屋)も娯楽(テレビ)もないころには、村へは、薬・小間物・野菜などの行商人、社寺の御師、野鍛冶などの職人、芸人などさまざまな職業の人達が入り出していました。

外と接する道からは、人・物・情報・文化や悪霊を始め、あらゆるものが入ってきますので、集落では、不浄なもの、危険なものは外へ出し、悪霊などは入り込まないように、入り口でくい止めようとしてきました。

津島神社へ毎年祭礼の日に代表が参ってお札を受けて帰り、村でお天王祭を行い、受けたお札は、村境に縄を張って下げたりしました。

祇園祭の1週間前に、天王祭として旧暦の6月8日タルオマント(小学生のお祭り)が行われました。

午後になると村の人達は農作業を休み、島の祭りの宿に集まって飲食しました。

子供たちは「やれこれやれこれ、八反田のせきが切れたぞよ、樽のせんも抜けたぞよ。」と歌いながら島を歩いて回りました。

たるおまん全景



やがて大人たちの手でタルオマントができると、手ぬぐいで鉢巻きをし、腰に力紙を付けて「ヨイサーヨイサー」とみこしを担いで宿参りをした後、白山神社の本殿の裏に納めました。

昭和35年頃まで続きましたが、現在は、子供獅子祭り(獅子かぶり)に変わって、新暦の7月の第3日曜日に行われています。

旧暦の6月8日

タルオマント(小学生のお祭り)

(4) 提灯山

旧暦の6月23日 提灯山

天王様に365個の提灯山を作り、おどりを奉納しました。薄暗くなると各家から提灯を持った家族連れが神社へ向かいました。提灯が揺れながら動いている様子は美しく、子供にとっては結構スリルがありました。帰りには万事屋でかき氷を食べるのが楽しみでした。

今は神社の総代、年行司の人達が提灯を飾っていますが、来所者は少なくなりました。

(5) お日待ち(溝役・道役)

各島ごとに宿を定めて、島の人が集まり酒食を共にして遊びました

昔は1月、5月、10月の年3回、2日にわたって行っていましたが、そのうちに半日ぐらいになり、区画整理が始まるころまで続いていました。

1月は龍泉寺の初観音の日に、5月は用水路の清掃(溝役)をした後に、10月は秋の稲刈りを前にした道直し(道役)の後や小学校の運動会の後にしました。

「お日待」ですので、2日間にわたって行っていたころは、昼、夜とも飲食を共にし、夜中語り明かし、朝一番鶏か鳴き、太陽がでるまで続けました。

(6) 溝役・道役(お日待ち)

村では各戸から1人ずつ出て、5月に「溝役」という用水路の清掃、10月に「道役」という道直しといった共同作業が実施されてきました。欠席した家には出不足金を徴収する島もありましたが、島の人たちは欠席した理由をお互いによく理解していたので、特別なペナルティは課さなかったようです。それを機会に島ごとに自前の慰労会(お日待ち)が持たれていました。農業・地域などについての辞用法交換の場として役立っていました。



▲平成5年頃 松河戸が行った最後の秋役で堰堤の掃除をする(中島の人びと)

(7) 講

松河戸では、村人同志の親睦や信仰を深めるために、古くから協力し合って神仏を祭る「講」が行われてきました。

島単位、ムラ全体、有志によって行われており、前者として弘法講、地藏講、秋葉講、永平寺講、総持寺講、道元講、報徳講など、後者には念仏講、庚申講。有志によるものに山上講、大峯講、富士講などがありました。皆でお金を積み立て寺参りの費用などにあてたりもしていましたが、区画整理後は、多くの講が消滅しています。

【島単位で行われていたもの】

① 弘法講

旧3月21日の命日に宿を定めて弘法さんを祀る。昔はだんごを作って参拝者に接待したが、その後は主に菓子である。

なお、観音寺の門前にも弘法様があるので、これも講員が祀っている。

② 地藏講

観音寺の地藏様にお参りをし、会食をする。また、女の人が御詠歌を歌う。

女性の年よりが多く集まっていた。ついでに頼母子なども行い、寺の什具などを寄付していた。

旧7月23日命日の御速夜には寺に講員が集まってお日待をし、その後盆踊りなどした。

昭和40年頃までは時々講員の家に集まり心経をあげていた。

接待は茶菓子程度あった。

③ 秋葉講

寺年行司の島代表が米を集め、11月の命日(現在は12月16日)に、観音寺の秋葉三尺坊を祀り、住職がお経をあげた。

夕食後遠州秋葉山の代参のくじを引き、引き当てた者は翌年春苗代前に参拝して、お札を迎えて各戸に配る。

④ 報徳講

お伊勢さまの参拝講で通称お日待ちといていた。

島ごとに太神宮の掛け軸をかけてまつり、酒食を共にした。1月、4月、9月に行っていたが、最後のころは1月のみ行われていた。

⑤ その他 永平講 総持講 道元講

【村全体で行われていたもの】

① 念仏講

仏の命日の御速夜に組の人が集まり念仏をあげた。

島によっては、年忌がなくて念仏のない年は12月にまとめて念仏をした。

念仏には餅をついて出したが、次第に小さいまんじゅうになった。今でも念仏のあるところは茶菓子程度の接待をする。

② 庚申(かんし)(こうしん)講

念仏講とおなじように、1年間に講員のところを回るよう、くじを引いて定める。明治の終わりころまでは午後から夕方にかけて、集まった子供に菓子を分けた。夜は大人が集まり五目飯を食べ、青面金剛童子の掛け軸をかけ、となえごとと心経をあげる。

昔は朝方まで心経をあげたり世間話をして過ごした後で、お供え物を各戸に配った。

【有志で行われていたもの】

① 御嶽講

4月から5月の吉日に、寺で先達が中心となって神事を行い、御岳経などをあげた。

夏には御岳山の登拝に参加する。また大峯山も参拝した。

講員は40人くらいで、先達となり行のできる人は10人前後である。

この先達となる人たちは、毎月宿を定め、覚明霊神の軸をかけ御岳経をあげる。食事はなく茶菓子程度で、寒行などをして、4月末に行う大講の費用の足しにした。

② その他 山上講 大峯講 富士講

(8) 正月の門松

煤(すす)はらいに餅つきをすまし、山から切ってきた門松を立てると、正月を迎えるすべての準備は終る。

正月神は歳神であり、祖霊だったという。

門松を立てるのは、それが祖霊のやってくる目印であり、依代(よりしろ)ともなったからである。14日のドンドも、実はこの門松の煙のって正月神が再び天に帰られる火祭である。



ドンド (松河戸町、庄内川原)

(9) どんど焼き

1月14日に庄内川原へ集まり、正月のしめ縄、門松など供え物を焼き上げ、新年の祈願をささげた。今は、成人の日に白山神社の境内で行っています。

(10) うんか祭(虫送り)

このうんか(ニカメイユ)の虫害を防ぐことを祈って行われました。

松河戸では、毎年旧暦の6月中旬、土用の5日後に行われました。

村の人たちは、当日の昼過ぎに白山神社に集まり、神主の祝詞、お祓いを受け、その後、子供たちによるおんかの行列がお宮を出発し、田のあぜ道をジグザグに進んで行きました。



(図 11)オンカ祭 稲の害虫駆除の虫送り
正副区長と子供参加

行列の順番は、かね、太鼓、鳳凰、斉藤別当実盛のつくりもの、「宇賀神」「五穀豊穰」「村内安全」の3本の幟がつづいた。

最後に子供たちが捨てる場所は、2か所あった。東は中切との境の庄内川堤防、西は長田のおんか塚である。

毎年どちらに収めるかは、その年の豊作占いと合わせて決められたが、それは観音寺の住職が区長宅でつくりものに精を入れる際に、区長がますの中から取り出す豆の数が偶数か奇数かによって決められた。(耕地整理後は村境の西の塚が消滅したので、東の庄内川堤防になった)

(11) はなのとう

旧暦4月苗代が済むと、代表者が熱田様の「花のとう」豊作占いの行事参拝に出かけ、また各家では余った粃をほうろくで炒って焼米を作って食べた。

(12) 総参り

田植えが済むと、一日農作業を休み、国府宮へ総参りをし、その後芝居見物などをした。

(13) 秋あげ

稲刈りが済み、粃を玄米にし終わると、ぼた餅(秋上げぼた)を作り、農具に供えたり、親せきなどに配った。

(14) 日乞い

昔から庄内川の水害に悩まされたところだけあって雨が続くと日乞いが行われた。

区長から触れが出されると、青年会が中心となって、先頭のもが榊を持ち、雨の中を裸で千度参りをする。また、青年会の手でお神楽があげられ、おこもりも行われた。

(15) 節分

節分の時に「いわしのカブ(頭)焼き焼き、鬼の目を突き倒せ」と唱えながら、いわしを公道と私有地との境目であるカド先で焼く慣例は今も続いています。

(16) カド

農家の屋敷内の一帯は「カド」といって、粃干しや子どもの遊び場など多様に使われていました。軒下やカドを通して隣接する家を結ぶ経路が日常的に使われており、往還へ出なくても直ぐ行ける通路として、ちょっとした用事や急ぐときには便利でした。

(17) 拾い子

父親が数えの42歳で生まれた子は、箕に入れて四ツ角に捨てて親せきの人などに救い上げてもらう風習がありました。道はけがれを消してくれると考えられていたからです。名前も捨てや拾いの字を入れて命名することもありました。

(18) しょうぶの節句

たけの子とふきで五目御飯を炊き、しょうぶとよもぎを入れて風呂を沸かしました。

(注意)

「松河戸町の沿革」は、《参考資料》の記事を転記又は抜粋してまとめたものです。間違いや追加など補筆訂正がありましたらご連絡ください。

《参考資料》

写真と図表で見る松河戸 松河戸誌研究会から
郷土誌かすがい

春日井市史 地区誌編 松河戸 昭和60年3月発刊